SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

作家と連携した鑑賞授業の取り組み：学校教育教員養成課程における事例研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2017-05-25 キーワード (Ja): 鑑賞教育, 作家, 連携, 学校教育教員養成課程, 学生の実態 キーワード (En): 作成者: 高橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010161

〈実践報告〉

作家と連携した鑑賞授業の取り組み
- 学校教育教員養成課程における事例研究 -

髙橋智子*

A Practical Report of Art Appreciation Education through Cooperation with Artists -A Study in the Teacher Training Course-

Tomoko TAKAHASHI

【要旨】

近年，図画工作科及び美術科の授業づくりにおいて，作家や学芸員（美術館等）と連携した取り組みが盛んになり，様々な実践が報告されている。前報[1]では，学校と作家が連携した授業づくりの取り組みについて，先行研究等からその傾向を分析し，静岡大学教育学部附属島田中学校で実践された取り組みについて報告を行った。同作家と連携した授業は，当該中学校での実践をきっかけに，学校教育教員養成課程の講義においても同様に実施している。本稿では，学校教育教員養成課程において実施した作家との連携授業についての報告を行う。授業に伴い，実践時に大学生に実施した鑑賞に関するアンケートから，大学生の鑑賞に関する実態を分析すると共に，作家との連携授業が大学生の鑑賞意識に与えた影響を考察する。

【キーワード】鑑賞教育　作家　連携　学校教育教員養成課程　学生の実態

1．研究の背景

近年，図画工作科及び美術科の授業づくりにおいて，作家や学芸員（美術館等）と連携した取り組みが盛んになり，様々な実践が報告されている。平成 20 年告示の中学校学習指導要領には「美術館・博物館等の施設や文化財等を積極的に活用するようにすること」や「実物の美術作品を鑑賞する機会が得られるようにしたり，作家や学芸員と連携したりして，可能な限り多様な鑑賞体験の場を設定するようにする」[2]との記述があり，学校と地域の文化施設及び作家等との連携による授業の充実が求められている。それに伴い，文化施設や作家等と連携し授業を構想することの魅力や教育的意義を理解し，充実した授業を展開できる実践力が教員に求められているといえる。一方で，平成 23 年に報告された「特定の課題に関する調査（図画工作 美術）」[3]の中では，「地域の美術館等と連携するような指導を工夫していますか。」の質問に対し，肯定的な回答をした小学校教員は 11.8%にとどまっている。さらに，日本美術教育学会の科研研究チームによる「鑑賞学習についての全国調査の集計結果（2014 年度小学校，2015 年中学校）」においても，教員の一般的な美術を愛好する在り方が鑑賞活動中心であるのに対し，学校における図工・美術教育では圧倒的に制作活動が中心となっていることが指摘されている[4]。その理由には，授業時数の減少や充実した近隣施設の有無，教員の資質に関する課題（知識不足）等があげられている。近年，美術館等の活用や作家との連携の充実が望まれているにも関わらず，現場教員が鑑賞授業に対して，不安や課題を抱えていることがこうした調査等から推測できる。

教員が鑑賞に関する指導力を身につける場としては，教員養成段階での学びと現場での研修等に分けることができるだろう。本稿では，前者について論じていくこととする。「図画工作科・美術科における鑑賞指導についての調査―2003 年度全国調査―」では，教員の出身大学における鑑賞に関する授業設定を問う設問が設定されており，中学校教員に比べ，小学校教員の「特に設定されていなかった」との回答が，過半数（51%）を占めるという結果となっている[5]。また，先述した調査（2014）においても，今後の図画工作科教育における鑑賞指導の充実のために教員養成段階での鑑賞の関するカリキュラムの充実の必要性について，「ある程度必要である」「とても必要である」と回答しているのは全体の 85%にものぼることが報告されている[4]。このことからも，鑑賞指導の充実のためには，現職教員の研修等を充実させることも不可欠であるが，教員養成段階での学びの充実や鑑賞の豊かな体験を通して，鑑賞に対する授業実践力を身につけることも同様に重要な課題であるといえる。

2．先行研究の動向

まず，教員養成課程における鑑賞を取り扱う授業に関する先行研究には，内田ら（2015）の研究がある[6]。内田らは，国内の大学について，鑑賞を取り上げている科目に関してシラバスの調査を実施している。これによると，鑑賞の内容を取り上げている科目には，教員養成課程における免許状取得のための科目や教養教育に関する科目等，多岐に亘っていることが指摘さ

＊美術教育講座

れている。このことから，大学の授業科目においても，鑑賞の内容が幅広く取り上げられていることがわかる。さらに，内田らは鑑賞教育の膨大且つ多様な要素の中から，学生が修得の必要のある鑑賞教育の要素を抽出し，各要素を関連付けて整理している。その上で，鑑賞教育の指導に携わる教員にとって，鑑賞教育の多様な目的を把握することや人や時代に応じた鑑賞教育の目的を考える能力が必要であると考察している。また，研究の一環として，教員養成課程２年生を対象に，鑑賞への認識及び知識を把握する調査も実施しており，鑑賞で学ぶ美に対する理解が生活に適用・応用されることの難しさ等の実態を明らかにしている。

つぎに，堀舘ら（2015）は，美術に対して受動的・消極的な学生が，作品に対して感じたことや思ったことを共有するシステムを開発するという研究を行っている[7]。このシステムを利用することにより，学生の美術作品の鑑賞に対する関心や意欲，興味を喚起できたという成果を報告している。

以上のように，教員養成課程において，大学生の鑑賞に関する実態調査や鑑賞教育の内容の抽出及び整理，指導方法の開発等について，既に着手されていることがわかる。ただ，鑑賞教育をテーマにした近年の研究のほとんどが小・中学校を対象としており，教員養成課程におけるそのあり方をテーマにしているものは少ないといえる。

３．研究の目的

本研究では，教員養成段階において，鑑賞の題材開発及び研究力や指導力を学生に育成するための授業のあり方を検討することを目的とする。本稿では，その試みの一つとして実践した学校教育教員養成課程における作家と連携した鑑賞授業についての報告を行う。さらに，実践時に実施した鑑賞に関するアンケートから，大学生の鑑賞に関する実態を分析すると共に，作家との連携授業が大学生の鑑賞意識に与えた影響を考察する。その結果を今後の授業改善の一助とする。

４．作家と連携した鑑賞の授業実践について

学校教育教員養成課程の「教科に関する科目」の「専門基礎図画工作」は，学部１年次の前期に設定されている科目である。対象は，美術教育専修以外の学生であり，受講前から，表現や鑑賞に苦手意識を持っている学生が多い。授業の目的は，美術の教養を深め，小学校教員に必要な造形知識と造形技能等を養うことである。学習内容は，創造的な造形活動の指導に関する表現や鑑賞領域の講義及び演習としている。授業では，学生自身が表現や鑑賞を通して，その魅力や教育的意義を自ら考えることができるように表現と鑑賞の両領域をバランスよく配置し，計画を立てている。2014 年度からは，附属島田中学校（以下，島田中学校と記す）での作家と連携した授業実践[1]をきっかけに，大学の「専門基礎図画工作」においても，同作家と連携した鑑賞授業を現在まで取り組んでいる。本稿においては，2014 年度に実施した授業を対象に報告を行う。

作家と連携した実践については，地域の NPO が中心となり作家と学校をつないだ事例や大学・学校・アーティストの連携事例，地域の芸術祭のプロジェクトの１つとして実践された事例等報告されているが，そのスタイルとしては，ワークショップ型の単発的なものが多い。本実践は，前報[1]同様，単発的な授業実施ではなく，講義計画の中に計画的に位置づけられたものであり，それが特徴である。

５．作家との連携授業の概要

（１）日時

2014 年７月 16 日 14：25～15：55

（２）授業計画

「専門基礎図画工作」（前期）の授業計画は，前半に表現，後半に鑑賞の授業を設定している。作家との連携授業では，事前に学生が表現活動に取り組み（図画工作科で扱う画用紙やはさみ・カッターを使用した切り絵制作），その過程において，作家との連携による鑑賞授業を設定した。

（３）連携作家と授業方法

連携する作家は，切り絵アーティストとして活躍中の福井利佐氏（静岡市出身）とした。作家とのコーディネイトは，授業者（筆者）が担当した。作家と連携した授業は，島田中学校での実践同様，作家自身に学生の前で表現に対する思い等を授業者との対談形式で語るというスタイルをとった（図１）。対談は，学生の興味関心に基づき内容を展開する必要があると判断したため，事前にアンケートを実施し，学生からの質問内容をカテゴリー毎にまとめたものを対談で使用した。質問内容は，事前に作家へメールで送信し，その内容を周知した。また，作家との連携授業前にはパワーポイントやワークシートを用いて，事前の作品鑑賞（平面及び映像作品等）を行い，連携授業への期待を高めた。当日は，パワーポイントやビデオ（制作の様子等）を改めて準備し，活用した。ビデオについては，福井氏に提供してもらった。

（４）事前打ち合わせ

授業前には，メールで打ち合わせを繰り返し，福井氏と授業目的を共有したり，これまでの既習事項に関する内容を確認したりした。

（５）当日の流れ

福井氏の紹介導入ビデオ（福井氏提供したものを授業者が編集したもの）を流した後，本人に登場してもらった。授業者と本人による作家紹介を簡単に行い，その後，学生の質問をもとに対談を進めた。対談の途

中では，適宜パワーポイントやビデオを使用し，対談内容について詳細な説明を加えるよう工夫した。最後には，学生から直接質問や感想を述べる時間をとり，作家との交流を図るようにした。

6．学生の鑑賞に対するアンケート調査

学生の鑑賞に関する実態を調査するために，「専門基礎図画工作」の授業内でアンケートを実施した。アンケートは，作家との連携授業の事前・事後の２種類を実施した。作家との連携授業が学生の鑑賞への意識へ及ぼす影響について把握するためである。本稿では，2014 年度のアンケート分析を行う。事前・事後アンケートの分析を行い，学生の鑑賞に対する実態を把握すると共に，作家との連携授業が学生の鑑賞への意識へ与えた影響について考察する。

（1）調査対象

学校教育教員養成課程１年次生／実践・心理・幼児・国語・数学・音楽・技術・家庭／121 名

（2）調査期間

2014 年６月～７月

（3）調査内容

調査内容は，事前アンケート及び事後アンケート共に，以下の項目となる。なお，本稿では，鑑賞に対する苦手意識を持つ学生が作家との連携授業において，鑑賞に関する意識がどのように変容したかを分析するため，それに関わる質問項目のみを分析対象とする。

①事前アンケート

・美術作品の鑑賞に対する印象や考えについて
・美術館等と連携した授業の経験及び行事への参加の有無とその活動時期及び内容について
・授業内外で作家と交流した経験の有無と活動内容
・美術館へ訪れた経験の有無と時期及びきっかけ
・美術館等での鑑賞の意思とその理由について

②事後アンケート

・授業後に表現や鑑賞に対する考えの変化と影響した授業内容について
・今後美術館等で鑑賞の意思とそれに影響した授業内容と具体的理由について
・福井利佐の鑑賞授業の感想について

（4）調査方法

自記式質問紙（選択・自由記述方式）調査

（5）分析方法

事前・事後アンケートの調査項目について，回答のあったすべてのデータを集計した。自由記述の項目は，カテゴリーに分け，集計を行った。

7．結果及び考察

本稿では，授業で実施した事前アンケートより，鑑賞に対して肯定的に捉えている学生（以下，肯定派）と否定的に捉えている学生（以下，否定派）の実態を

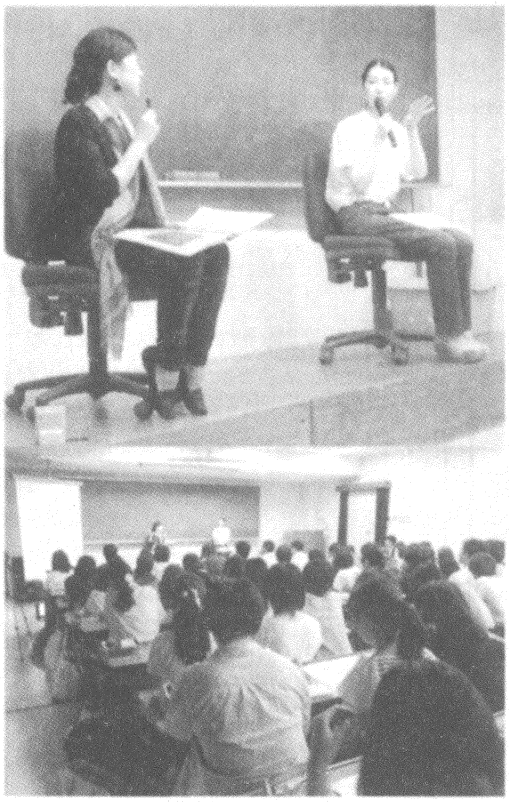

図１：作家と授業者の対談の様子（2014 年７月 16 日）

把握し，作家との連携授業が学生の鑑賞への意識へ与えた影響について事前・事後アンケートをもとに分析する。

（1）事前アンケートの分析

①鑑賞に対する印象や考えについて（複数回答可）

鑑賞に対する印象が考えについて，肯定派と否定派に分けて分析を行った（図２）。肯定派は 65 名，否定派が 56 名となった。肯定派が否定派を対象上回る結果となった。肯定派の理由としては，作者の心情や良さ工夫等を感じ取れるという回答が約 35％であった。次いで，鑑賞が面白い・楽しい，興味関心があるという回答が高かった。否定派の理由としては，鑑賞は分からない・楽しくない・難しい等という回答が 24％となり，一番高い値であった。次いで，感動を言葉で表すことが苦手である，価値が理解できない，方法が分からない等の回答が続いた。この結果から，鑑賞を肯定的に捉えている学生は，作品から良さや工夫，美しさ等の価値を感じとることを鑑賞の魅力としている事がわかる。鑑賞を否定的に捉えている学生は，鑑賞を難しく分からないものであると捉えている傾向にあり，言葉での交流に苦手意識を持っていたり，鑑賞の方法がわかならないと感じていたりすることが明らかになった。

②連携授業や行事への参加の有無について

肯定派と否定派のこれまでの連携授業や行事への参加の有無について分析を行った（図３）。過去の連携授業や行事への参加については，肯定派が 41.5％，

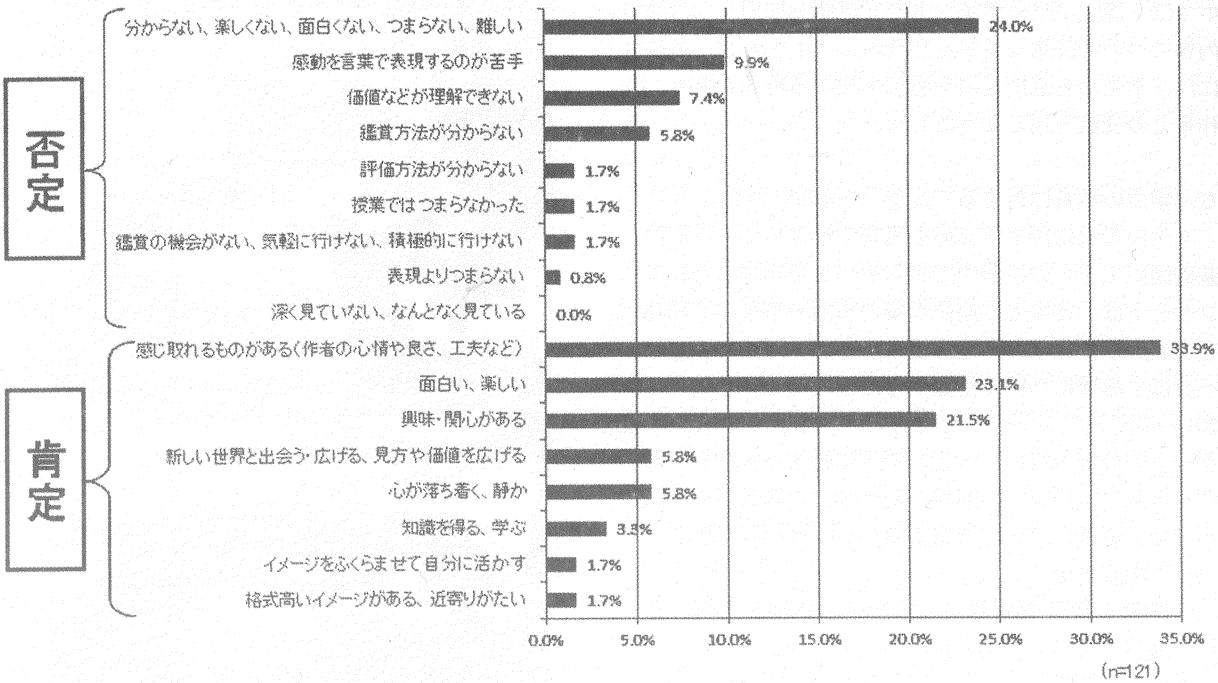

図2 事前アンケート「鑑賞に対する印象や考えについて(複数回答可)」

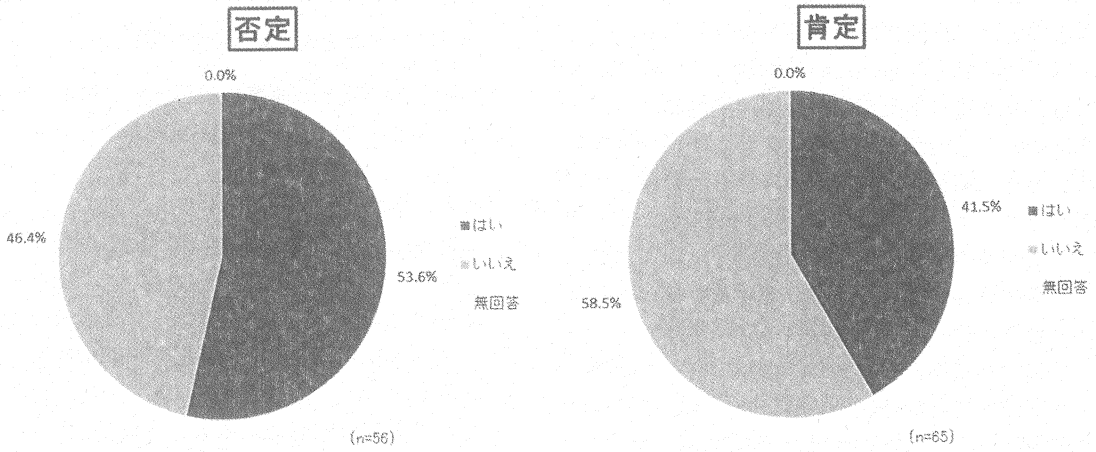

図3 事前アンケート「連携授業や行事への参加の有無について」

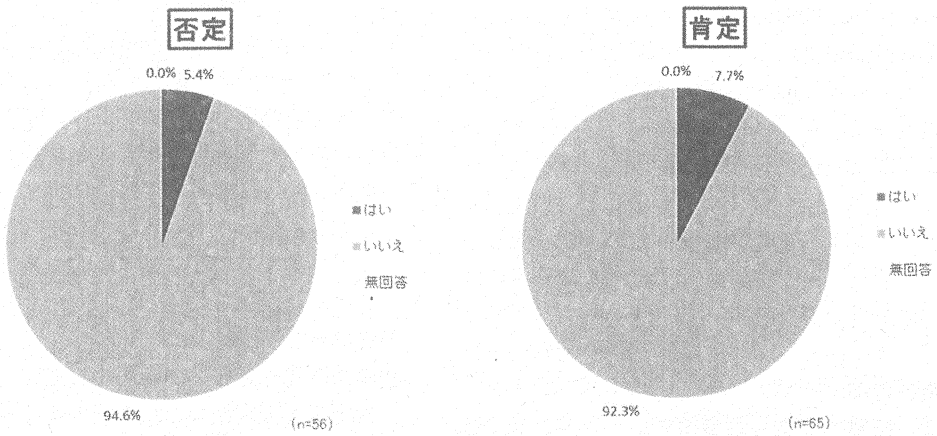

図4 事前アンケート「美術作家との交流の有無について」

否定派が 53.6%の学生が参加したことがあると回答した。この項目では，肯定派よりも否定派の学生の方が，連携授業や行事へ参加しているという結果となった。

③美術作家との交流の有無について

美術作家との交流について問う項目では，肯定派では 7.7%，否定派では 5.4%の学生が経験ありと回答しており，若干ではあるが肯定派が否定派を上回る結果となった（図４）。ただし，肯定派も否定派も９割以上が，美術作家との交流については経験がないという結果となった。

④美術館や博物館の鑑賞経験の有無について

美術館や博物館の鑑賞経験の有無について問う項目では，回数に関わらず，肯定派では 93.8%，否定派では 87.5%の学生が経験ありと回答した（図５）。肯定派では，9 割をこえる学生が美術館等での鑑賞経験があると回答していた。また，否定派の学生についても，肯定派の学生に及ばないものの９割に迫る学生が美術館等での鑑賞経験があると回答していることがわかる。

⑤美術館鑑賞の意思について

今後の美術館鑑賞の意思について問う項目では，肯定派では 90.8%，否定派では 55.4%の学生が鑑賞に対して肯定的な意思を示した（図６）。否定派の学生は，肯定派よりも低い値を示したが，過半数以上が美術館鑑賞の意思について肯定的な回答があったことは興味深い結果となった。その理由については，次の項で分析を行う。

⑥美術館鑑賞の意思（肯定）とその理由について

⑤で回答した美術館鑑賞への意思（肯定）に関する理由について，肯定派（ｎ＝59）と否定派（ｎ＝31）について分析を行った（図 7－1）。肯定派では，興味関心があること（37.3%）が高い値であり，次いで知識・技能・表現方法の獲得（20.3%）や新たな価値の創造（18.6%）等が続いた。否定派では，興味関心があること（51.6%）が高い値であり，次いで知識・技能・表現方法の獲得と世界を広げること（12.9%）が続いた。この結果から，美術館鑑賞をしたいと回答した肯定派も否定派の学生も共に，興味関心があること，知識・技能・表現方法の獲得が高い値を示している事が分析できる。鑑賞の目的に，表現に関する事項があがっていることは興味深い視点であるといえる。また，否定派の学生については，鑑賞に対して苦手意識はあるものの，美術館での鑑賞については興味関心

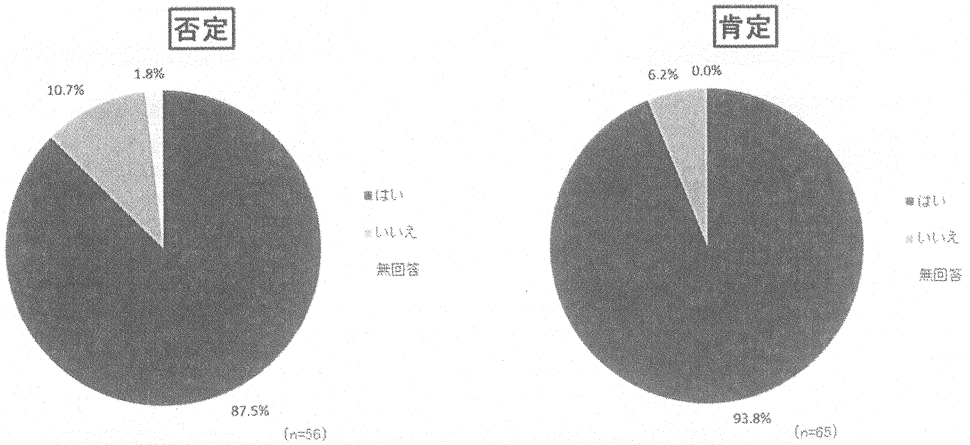

図5 事前アンケート「美術館や博物館の鑑賞経験の有無について」

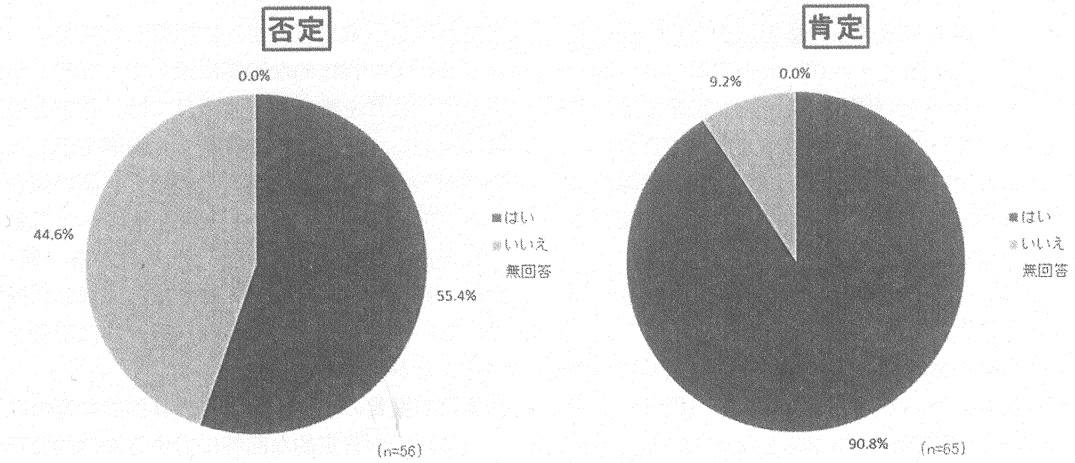

図6 事前アンケート「美術館鑑賞の意思について」

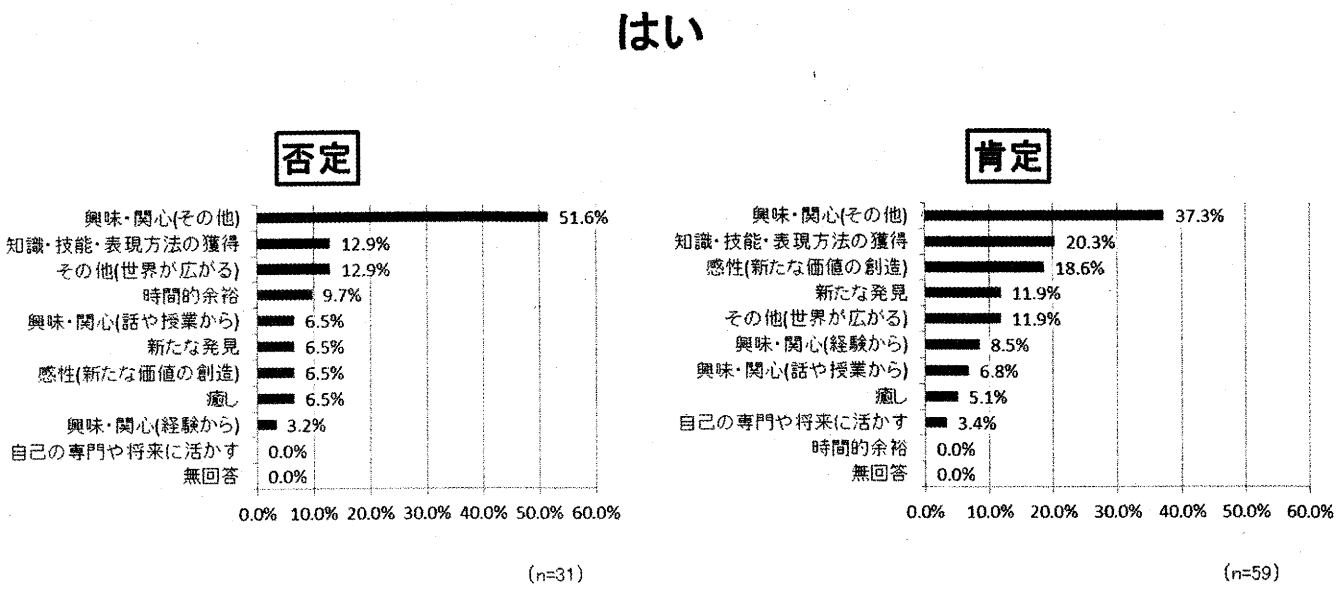

図7－1　事前アンケート「美術館鑑賞の意思(肯定)とその理由について(複数回答可)」

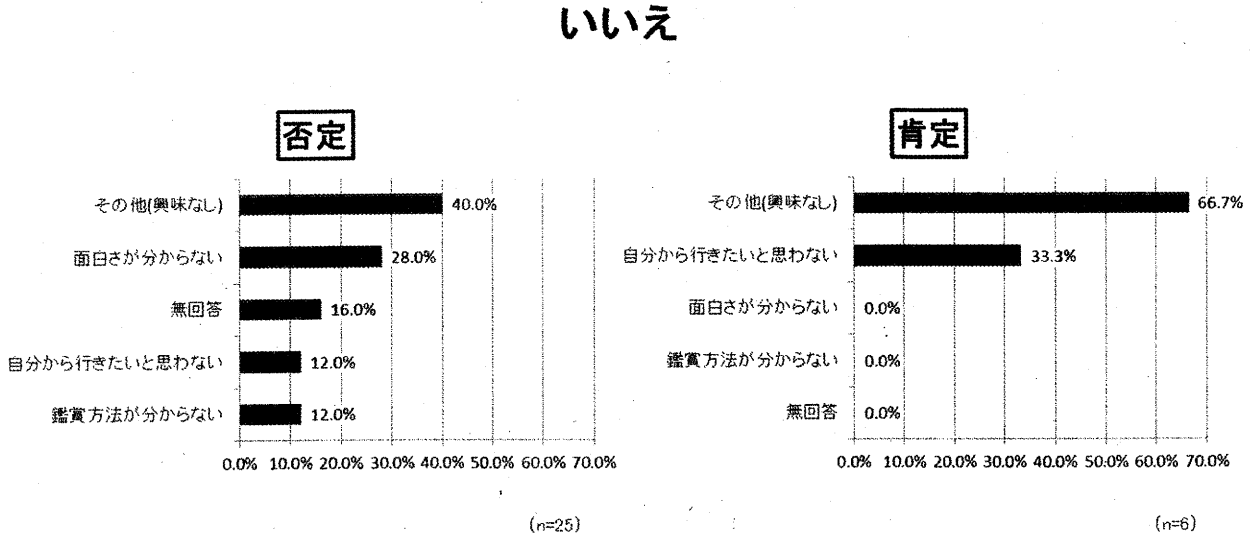

図7－2　事前アンケート「美術館鑑賞の意思(否定)とその理由について(複数回答可)」

があることが今回の結果からわかる。

⑦美術館鑑賞の意思（否定）とその理由について

⑤で回答した美術館鑑賞への意思（否定）に関する理由について，肯定派（n＝6）と否定派（n＝25）について分析を行った（図 7－2）。肯定派では，興味がない（66.7%）が高い値であり，次いで自分から行きたいと思わない（33.3%）と続いた。否定派では，興味がない（40.0%）が高い値であり，次いで面白さが分からない（28.0%）と続いた。

（2）事後アンケートの分析

①美術鑑賞の意思について

作家との連携授業後の事後アンケートを通して，美術館鑑賞の意思について再調査を行った（図8）。肯定派は 89.2%，否定派は 73.2%となっている。事前の図6と比較すると肯定派はほぼ同じ値だが，否定派では特に値（約 34%）が高くなっていることがわかる。

②美術鑑賞の意思（肯定）に影響した活動について

（2）①の肯定的な回答に対して，影響した授業内容を問う項目を設けた。本項目では，作家との連携授業に関わらず，本講義で実施した内容を示した。まず，否定派（n＝41）では展覧会の紹介が高い値を示している（56.1%）。次いで，作家と連携した活動（e と f）が高い値を示していることがわかる（図 9－1）。次に，肯定派（n＝58）では作家と連携した授業が，更に高い値で美術館での鑑賞（肯定）に影響を与えていることがわかる（図9－2）。

③美術館鑑賞の意思（肯定）の具体的な理由について

（2）①の肯定的な回答に対する具体的な理由についても問う項目を設けた。否定派（n＝41）は，作品

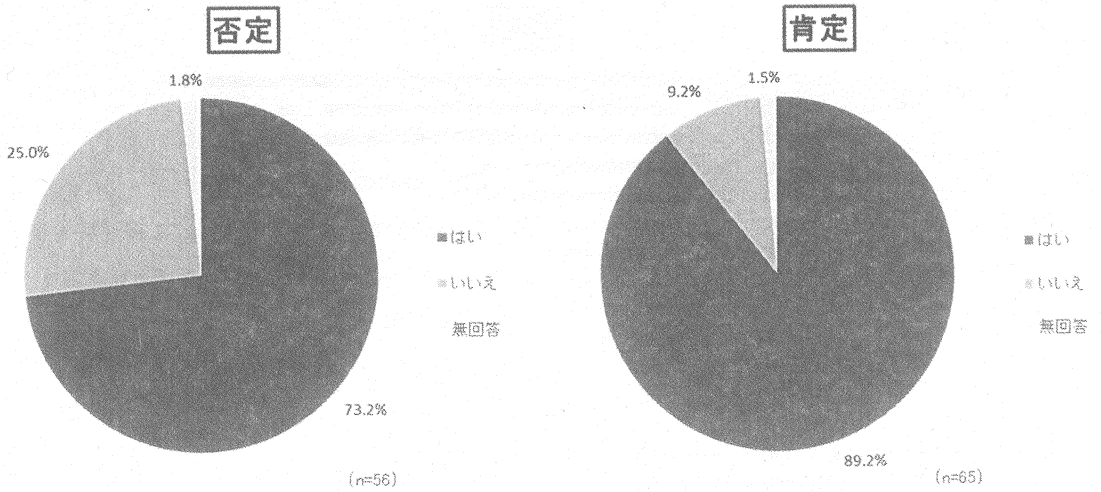

図8　事後アンケート「美術鑑賞の意思について」

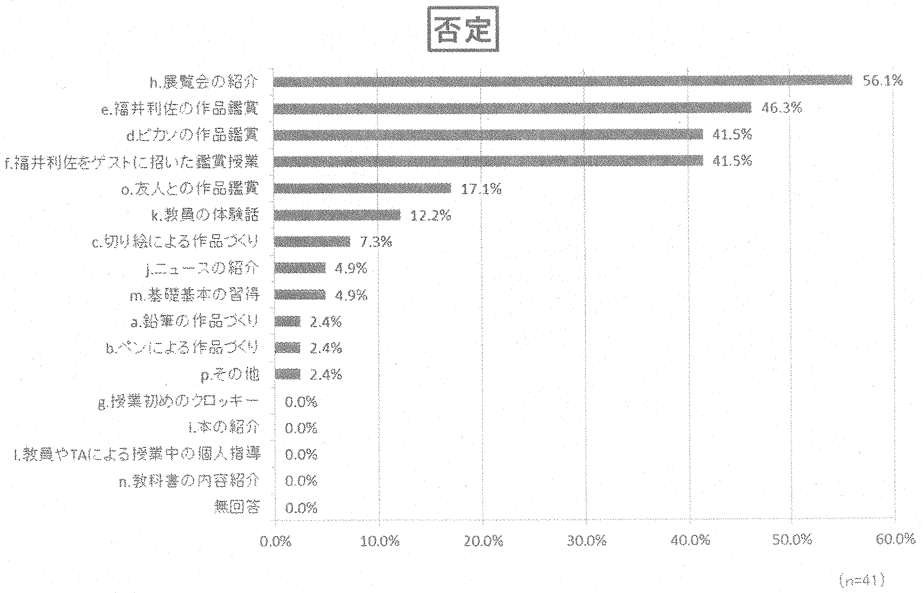

図9－1　事後アンケート「美術鑑賞の意思（肯定）に影響した活動について（複数回答可）」

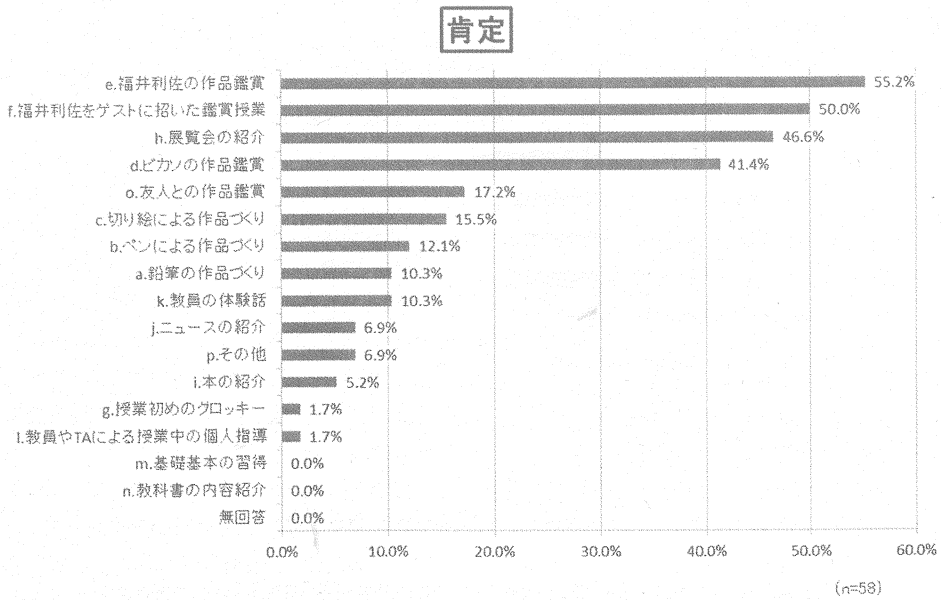

図9－2　事後アンケート「美術鑑賞の意思（肯定）に影響した活動について（複数回答可）」

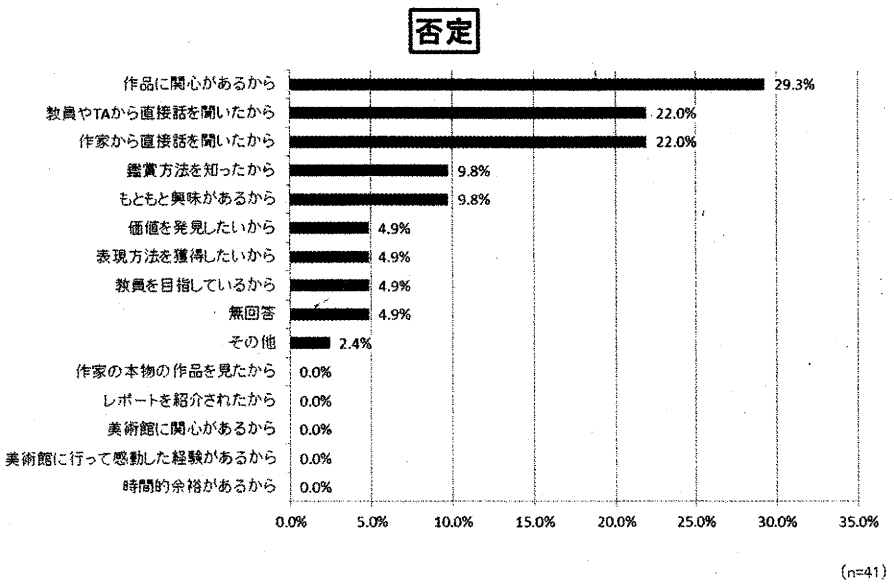

図10－1　事後アンケート「美術館鑑賞の意思（肯定）の具体的理由について（複数回答可）」

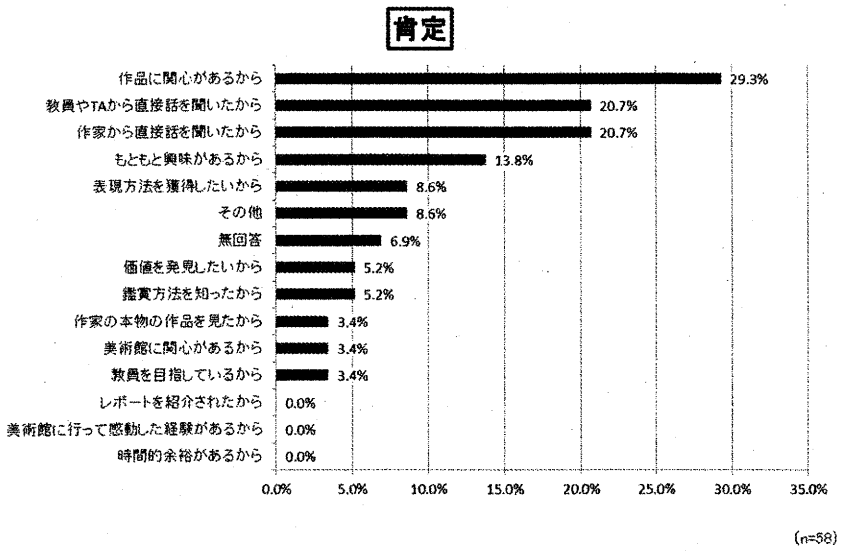

図10－2　事後アンケート「美術館鑑賞の意思（肯定）の具体的理由について（複数回答可）」

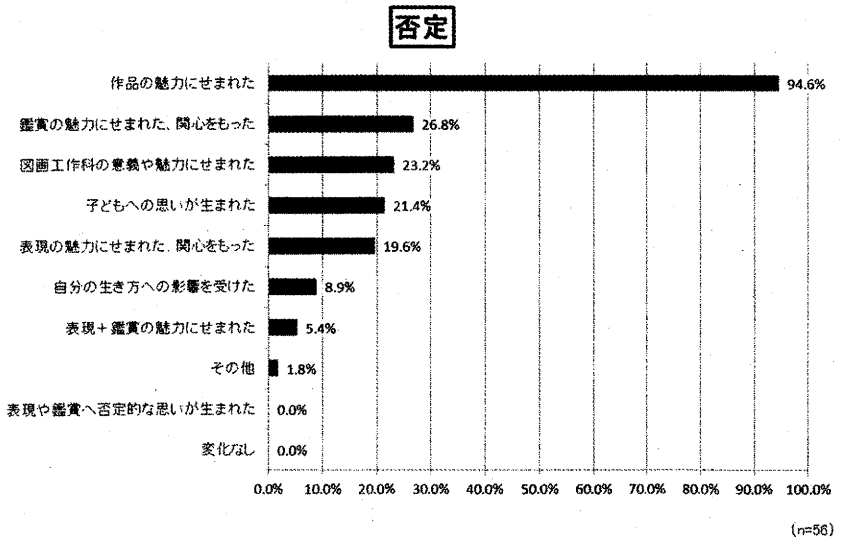

図11－1　事後アンケート「福井利佐をゲストに招いた鑑賞授業の感想について（複数回答可）」

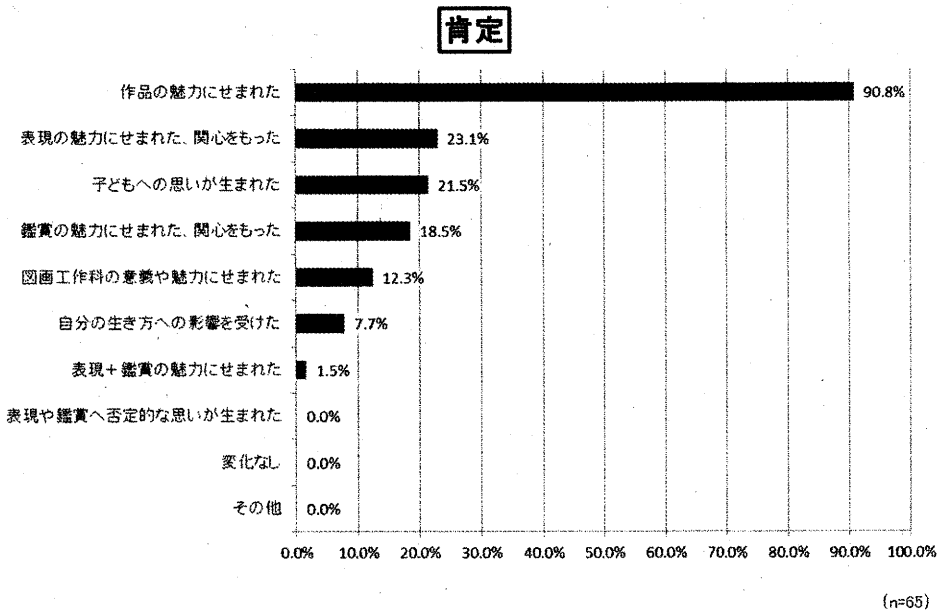

図11－2 事後アンケート「福井利佐をゲストに招いた鑑賞授業の感想について（複数回答可）」

に興味があるという回答が高い値（29.3%）であった（図 10－1）。次いで作家から直接話を聞いたことが続いている（22.0%）。肯定派（n＝58）でも，ほぼ同様の傾向であった（図 10－2）。授業を通して，美術作品に興味が湧いており，作家の直接的な対話も影響していると考えられる。

④福井利佐をゲストに招いた鑑賞授業の感想について

作家との連携による授業を通して，肯定派（90.8%）も否定派（94.6%）も作品の魅力に迫れたという回答が高い値を示した（図 11－1 及び図 11－2）。さらに，否定派は鑑賞の魅力に迫ると共に鑑賞に関心が持てたという回答（26.8%）や図画工作科の意義や魅力に迫れたという回答（23.2%）も上位に位置づいている。

福井氏との連携授業では表現者である作家本人の想いをじかに聞いたり対話したりすることのできる貴重な機会となった。学生は，連携授業前に切り絵の制作に取り組んでいるため，対談の際に行った事前質問では，鑑賞者としての視点のみならず表現者の視点からの質問等も多かった。授業後の感想の中には，「切り絵を自分達でもやっているということによって，より福井さんの作品のすごさを実感した。」と述べている学生もいた。中学校の実践同様に表現と鑑賞の活動を授業過程においてリンクさせることで，学生が鑑賞に対して幅広い視点を持ち，興味関心が高まる可能性があるといえる。また，作者や作品に込められた想いに迫ると共に，鑑賞や表現の魅力を強く感じていることもアンケートから考察できた。図 11-1 や図 11-2 でも示されているように，図画工作科の意義等に迫る感想も多数あげられている。事後アンケートからは，作家との直接対話を通して，表現や鑑賞の魅力ひいては図画工作科や美術科の意義に関して考察を深めている学生の姿が見られた。島田中学校で同様の実践を担当教員は，以下のように述べている[1)]。

「印象的だったのは，福井氏が，中学生を決して子ども扱いせず，どんな質問にも，一人の人間として誠実に応えてくださったことである。全身全霊で命の輝きを表現している福井氏の心からの言葉が，子どもたちの心と共鳴していくのが伝わってきた。作品と作者，そのどちらもが同時に輝き，目の前でダイレクトに想いを伝えてくれる。自分の言葉にも，耳を傾け，応えてくれる。その濃密な他者間対話が，生徒達の美術への意識をより高めたのは間違いない。」

大学での実践においても，同様のことがいえる。作家の表現や鑑賞，美術教育に対する熱い思いを直接的に受け止め，表現及び鑑賞活動に対して新たな意義や価値を見いだしている学生が多く，感想の中には，本実践が自身の美術や美術鑑賞への興味関心を喚起するきっかけになったと回答している学生もいた。

8．結語

本稿では，学校教育教員養成課程において実施した作家と連携した鑑賞授業について報告を行ってきた。授業に伴い，実践時に大学生に実施した鑑賞に関するアンケートから，大学生の鑑賞に関する実態を分析すると共に，作家との連携授業が大学生の鑑賞意識に与えた影響を考察した。教員養成段階における作家と連携した授業実践が，鑑賞に対して否定派の学生に与えた影響について，改めて確認できた。

本講義を受講しているのは，美術教育専修以外の学生である。これらの学生の中には，図画工作科や美術科の授業（表現及び鑑賞）に対して苦手意識を感じて

いるものが多い。図画工作科の内容や指導について学ぶ講義は，大学の科目としては，本講義と「図画工作科教育法Ⅰ」の２科目のみである。その中で，作家と連携した授業実践を単に実施すればよいということではない。実際に，先のアンケートにおいて，鑑賞に対して肯定的に捉えている学生も否定的に捉えている学生も同様に美術館等での鑑賞経験があると回答していた（図５）。美術館での鑑賞を経験していたとしても，鑑賞に対して否定的に捉えている学生がいるという結果となった。このことは，学生が過去に美術館での鑑賞を経験していたとしても，その内容により，鑑賞への捉え方が肯定的にも否定的にもなることを示唆するものである。授業においては，授業者が，学生の表現や鑑賞に関する実態把握を行い，明確な目的を持つと共に，単発的な活動ではなく継続的に授業過程の中に位置づけることが重要となる。また，本授業では，20～150 名と受講生の数が多いため，一方的な知識注入型の授業になる可能性がある。作家との連携授業においても，そのことが懸念されたが，学生から作家への質問項目を事前にアンケート集計し，個人の興味関心が対談に反映されるように工夫を行った。学生の実態をもとに計画的に授業計画を構想すること，魅力ある授業を構成すること，事前・事後授業を充実させること等は中学校同様に大学においても，重要な事項であるといえる。

本講義を受講した学生の中には，一年後に受講する図画工作科教育法Ⅰの自由課題において，地域の美術作家に自らインタビューに行き，それをレポートとしてまとめてきたものがいる。大学での学びが持続的な学生の美術への興味関心を促し，ひいては教員になった時にその魅力や鑑賞教育の意義を子ども達に伝えることのできる指導力や実践力を身につけることが今後期待される。本調査結果をもとに，さらに授業を改善し，今後も鑑賞の題材開発及び研究力や指導力を学生に育成するための授業のあり方を検討していきたいと考えている。

註

1) 加茂千景 高橋智子「作家と連携した鑑賞授業の取り組み－静岡大学教育学部附属島田中学校での事例研究－」，静岡大学教育実践総合センター紀要，24，2015，pp.133-144
2) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 美術編」日本文教出版，2008，p.80
3) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果」平成 23 年 3 月
4) 「図画工作科における鑑賞学習指導についての全国調査集計」，日本美術教育学会，http://www.aesj.org/，2015，平成 26・27・28 年度科学研究費基盤研究（B）「学校における美術鑑賞の授業モデルの拡充と普及についての実践的研究」（課題番号 26285204）研究代表者：松岡宏明，研究分担者：赤木里香子，泉谷淑夫，大嶋彰，大橋功，萱のり子，新関伸也，藤田雅也
5) 日本美術教育学会研究部「図画工作科・美術科における鑑賞指導についての調査―2003 年度全国調査―」http://www.aesj.org/nc2/htdocs/?action=common_download_main&upload_id=274（2016.12 月現在）
6) 内田裕子 大岩幸太郎「教員養成課程における鑑賞教育の指導内容についての考察」埼玉大学紀要教育学部，64（2），2015，pp.37-49
7) 堀舘秀一 舟生日出男「美術作品鑑賞における教師・学生間のインタラクションを促進するタブレット端末用アウェアネス共有システムの教育実践的評価」創大教育研究（24），2015，pp.15-29